令和５年度　山形県地域づくり実践交流集会　実施報告（ＨＰ版）

◆日時　：１１月４日（土）１３：３０～１６：３０
◆会場　：遊学館第１研修室
◆テーマ：地域づくりへの提言～若者達の地域へのまなざしと行動から～
◆参加者：３３名
◆内容　：　平成 12 年より開催している当事業では、平成 24 年以降、地域づくり活動に取り組む若者や高校生から実践報告者として登壇いただき、若者の参加促進に努めてきた。今年度はこれまでの若者や高校生を取り入れた交流集会をふりかえると共に、地域の担い手育成の成果と課題を明らかにし、これからの地域づくりの未来を考える。

プログラム
13:30～　開会･オリエンテーション
13:40～【シンポジウム】「地域づくりへの提言～若者達の地域へのまなざしと行動から～」
　シンポジスト：阿部 康子 氏（前「山形学」企画委員長）
　安藤 耕己 氏（山形大学地域教育文化学部教授）
　石井 貴之 氏（山形県青年の家 研修主査）
　コメンテーター：青木 孝弘 氏（宮城大学事業構想学群准教授）
15:15～【ワークショップ】「地域づくりの未来を考える」
16:30　閉会
　コーディネーター：一般社団法人とちぎ市民協働研究会代表理事 廣瀬隆人氏

◆当日の様子

はじめに地域学の視点から、３４年の歴史ある「山形学」で長年企画委員長として関わられた阿部康子氏より、山形学の理念やこれまでのあゆみについてお話いただいた。これからの地域学の提言として「消極的受容力」という言葉を挙げられ、この言葉を方言の「うるかす（水に浸けておく、ふやかす）」に訳し、せっかちに結論を出そうとせず、行き詰ったらしばらく「うるかす」とその間に全体が見えてきて積極的な創造性が出てくるのではないかとまとめられた。

安藤 氏　　阿部 氏

続いて、山形県の青年団の歴史的視点から、安藤耕己氏より近代以降における日本の青年団施策の歴史を戦前・戦後でふりかえると共に、戦後における山形県の青年団実践が長野県と共に全国の先駆的・モデルとして位置づけられていた歴史についてお話いただいた。また、青年達の活動は結婚等によるライフサイクルの変化により１０年周期で活動が終わってしまう傾向があることや、近年の南陽市の青年教育を例に、行政が責任を持って青年教育に取り組み続けることが大切であるとお話しいただいた。

続いて、現在の青少年活動について石井貴之氏より青年の家「ボランティアサークル nico こえ」での小児ガン支援「レモネードスタンド」についてお話いただいた。石井氏より、大人が若者の活動を支えるには、彼らの熱量をやってみようと働きかけ、実現させることが大切である。伴走者である大人は若者にあたかも「自走」しているかのような「使命感」と「責任感」を育むことが大切であると語られた。

コメンテーターの青木氏からは「山形学」企画委員の議論のプロセスが３４年におよぶ成果に繋がっていると話し、どう地域を知り、そこからどう生きていくかのアイデンティティを確立し、地域づくりまでつなげていくことが大切である。また、組織の中が変わることもあるし、許容することが若者団体には必要である。そして自主性を重んじながら大人が伴走する大切さについてコメントをいただいた。

後半のワークショップでは、グループごとにシンポジウムの感想を共有し、地域学・地域づくりで、これから何ができるかを話し合ってもらい、各班で発表。全体的に活発に議論や交流ができた集会となった。

石井 氏

廣瀬 氏　　青木 氏

参加者 Voice

・皆さんの活動を知ることができて、刺激になりました。
・普段話し合いする機会がない方々とたくさん話し合えた。
・福祉の分野にも地域学という考えは必要だと思いました。
・シンポジストの発表が素晴らしかった。盛り沢山。
・学びを深められて良かったです。ありがとうございました。
・これからの後継者育成を考えるうえで参考になった。
・他県の事例をもっと多く聞きたい。
・たくさんの方とつながりが持てた。
・今後、福祉は地域を支えることを大事にしていくことになると思います。そのためにも、医療・福祉の人達にも地域について学ぶ必要があると思いました。
・様々な立場の方に、実践されていることを直接お話いただけて、大変刺激をいただきました。青年団の歴史なども勉強になりました。
・人口減著しい未来、それを踏まえてどんなふうに地域を維持していけば良いのか、果たして維持存続はできるのか、そのような内容に発展させていって欲しいです。

会場の様子

参加団体ポスター